若 き 友 へ

2003 年 4 月 6 日
経済学部教授　髙島　均

所感 03-01　戦争の国から　日本の皆様へ

今回のアメリカとイラクの戦争、日本ではどのように受け留められているのでしょうか。『戦争』ということだそうですが、私には、これは『戦争』という用語の定義から逸脱しているように思えてなりません。『戦争』というのは、私に言わせれば、対等な国が、お互いに武器を持って遣り合うものであり、今回イラクで起きていることは、ただ、一方的に、アメリカがイラクの国土に侵略し、「大量破壊兵器」を使って攻撃し、それに対して、イラク側がなけなしの抵抗をしているのであり、『戦争』という概念からは外れているように思えます。

『サダム・フセインが指導するイラクの、「大量破壊兵器」の保有と製造に対する野心を打ち砕き、かかる非人間的な野望を持つサダム・フセインというテロリストからイラクの人民を救い出す』ために、自らが保有している「大量破壊兵器」を用いて、イラクへの攻撃が開始された時、テレビは、カリブの海でクルーズに興じる人々、オスカー賞に輝く華やかな芸能人のパーティーなどを放映していました。『戦争』は、一般のアメリカ人にとって、遠い国の出来事で、自分達の生活には関わりのないものなのです。

もともと、アメリカ人にとって、戦争というのは、そういうものでした。唯一アメリカの国土が敵国から攻撃されたのは、先の太平洋戦争における日本による真珠湾攻撃だけです。真珠湾のあるハワイは、アメリカの国土の一部とは言っても、本土から遠く離れた太平洋の島々です。アメリカ人の心の奥底では、アメリカが、即ち、自分達が攻撃されたという意識は薄いものだったでしょう。その意味では、2002 年 9 月 11 日のニューヨーク世界貿易センタービルを初めとして、アメリカの中枢部が狙われたのが、戦争によってではありませんが、アメリカ、即ち、アメリカ人自身が攻撃された唯一の経験です。

『戦争』は、人々の生活の遠いところにあるといいましたが、それでもやはり、戦争の影が日々の生活の中に忍び寄ってきています。あちこちの教会に、「Pray for Our Troops.」という標語が、国旗とともに掲げられるようになりました。いくつかの教会では、「戦地」へ送るために慰問箱が設置されるようになりました。戦地で戦っているアメリカ兵を励ます手紙・小物や写真などを送るためです。毎週土曜日には、全国の退役兵による連帯をアピールするデモ行進が行われるようになりました。ここ、ホーランドのような田舎町でも、

退役兵が、戦地で戦っているアメリカ軍を励ますためのデモ行進を行っています。報道機関による戦死者の報道は、さながら、戦死広報です。顔写真、年齢、出身地、所属部隊、戦死の状況が一覧になって載っています。
（http://www.cnn.com/SPECIALS/2003/iraq/forces/casualties/index.html）。

もっとも、2002 年 9 月 11 日の時には、全米が、「イスラム過激派憎し」一色だったようですが、今回のイラクへの攻撃に対しては、反対意見もかなりあり、必ずしも、戦争賛成一色ではありません。開戦の直前には、首都ワシントン D.C.で大きな反戦集会が開かれましたし、新聞にも、「私は、戦争に反対することによって、わが軍隊を支援する」という意見広告が載ったりします。ただ、私が非常に感銘を受けたのは、戦争に賛成するものも反対するものも、いずれも、アメリカ国旗を掲げて集会やデモ行進をしていることです。日本では、政府の政策に反対する集会が、日の丸の旗を掲げて行われることは考えられません。それは、大日本帝国が太平洋戦争の敗北によって崩壊し、その後、「日本国」が成立してから今日に至るまで、国の統一の象徴である「国旗」・「国歌」をどうするかという問題を、避けてきた結果です。何か、情けない思いを感じます。勿論、私は、『日の丸』を「日本国」の国旗とは考えていませんが。

話が少し本題から逸れてしまいました。アメリカの話の戻ります。今、Jessica Lynch ジェシカ・リンチという若い女性兵士が「救出」されたことが、大きく報道されています。ジェシカ・リンチは、Nasiriya においてイラク軍の急襲を受けた際、イラク軍の捕虜（Prisoners of War: POW）となったり、行方不明（Missing in Action: MIA）となったアメリカ兵の一人です。彼女は、イラク軍の急襲を受けた際に負傷し、Sadam Hospital に収容されていました。今回、武装ヘリコプター6~7 機で、その病院を急襲し、彼女を「救出」したということで、その一部始終が録画され報道されているのですが、私には、これがどうして「救出」なのか、理解出来ません。特に、この救出作戦がイラク側の抵抗を全く受けずに成功したことが、アメリカ軍の作戦の完璧さの証拠として強調されているのですが、私には、むしろ、イラク側の冷静さの証拠としか見えません。負傷者を多数収容し、治療にあたっている病院を舞台として戦闘行為を行えば、それこそ、キチガイ沙汰の非難を受けるだけしょう。
占領した地域にある工場で、「化学薬品を大量に見つけた」という報道が、「おそらく化学兵器を作る材料だったのだろう」というコメントとともに報道されています。工場に化学薬品が多量にあるのは、どの国でも同じです。イラクだと『化学兵器の材料』であり、アメリカだと『日常品の生産材料』だという主張の根拠は、何なのか、一度も説明されたことがありません。
「イラク南部において、アメリカ軍が、地域住民から歓迎されていない」という報道をし

た NBC のキャスターは、「誤った報道を行い国民に誤解を与えた」ということで解雇されました。
「テロリスト」・「化学兵器の恐怖」という言葉があたりを飛び交い、アメリカ人は、集団ヒステリーに陥ってしまったのではないかという感じがします。

イラクに対して「大量破壊兵器の破壊」と「核兵器の開発と保有の野望を捨てる」事を要求するアメリカが、「大量破壊兵器を持ってイラクを攻撃し」、また、「多数の核兵器を持っている」のは矛盾ではないか、と知り合いのアメリカ人に聞いたことがあります。このような意見は、今回のイラクへの軍事行動を批判する人々でさえ、誰一人言いません。私の質問に対して、友人の答えは、次のようなものでした。「確かに、アメリカは、大量破壊兵器はもちろん、大量の核兵器を保有している。しかし、アメリカは、広島・長崎における核爆弾使用の経験から、2 度と核兵器を使用しない意思を持っている。しかし、イラクに、そのような理性を期待することは出来ない。だから、アメリカは、大量破壊兵器や核兵器を保有していても構わないが、イラクの場合は許されないのだ。」
私が見る限り、この友人は、アメリカ人の中でも、かなり理性的に物事を喋ることができる人です。あなたは、彼の意見を、どのように思いますか？

9 月 11 日以降、世界中を『テロリスト』『悪の権化』という言葉が飛び回っています。私は、これらの言葉が好きではありません。『テロリスト』も、権力を握れば『英雄』として評価されるのが、現実世界です。ある人、あるグループを『テロリスト』のレッテルをつけて批判するのは、その人、そのグループを弾圧することが、自己の利害に適うような立場にいるからです。ある行為が『悪』であるかどうかは、少なくとも、現実政治の中では、価値判断や立場の問題でしょう。ある「人」が『悪の権化』であるかどうかは、神のみが判断できるものでしょう。

私は、武力を用いた解決方法をいかなる場合でも否定するものではありません。特に、「国家の指導者の立場からは、武力による決着を泣く泣く選択しなければならない状況がある」という見解を、否定するつもりはありません。でも、今回のイラクへの武力行使は、どうしても、そのようなケースであるとは思えません。10 数年前に訪れたアメリカ社会と今回経験しているアメリカ社会と比べた時、全く変らぬものを見出すとともに、大きく様変わりして点も感じます。いずれ、私のアメリカ社会に対する感想を述べたいと思います。